



## 日本と欧米におけるアレルギー制御の試み

Comparative review of Allergy Control in Western and Japanese Field

東京水産大学保健センター所長（教授）

木 谷 誠 一

Pollinosis by Japanese Cedar in spring has become national phenomenon. Steroid treatment in atopic dermatitis and bronchial asthma is essential, but causes side effects when used improperly. Sophisticated research in allergy will go on to develop a new therapy using drugs such as anti-IL5, anti-IgE or DNA-based immunotherapy. Our projects involve the traditional and affordable resources such as simple preventive tips and Japanese green tea. Comparative review of allergy control will be introduced.

毎年春の狂想曲のようにスギ花粉症が注目をあびる。アトピー性皮膚炎や慢性喘息のコントロールにおいて、ステロイドは、必須であり 各アレルギー関連学会のガイドラインで、むしろその適正使用が、推奨されている。しかし、不適切な使用によるステロイドの副作用が、患者やその家族やマスコミを通じて、喧伝されている。副作用のない薬物の開発は、患者はもとより、医療関係者の夢である。そうした中、独立した世界的な製薬会社の開発した2種のヒト型抗 IL-5 抗体の気管支喘息患者における第Ⅱ相臨床試験が、製薬会社関係者、アレルギーを専門とする医師や研究者の期待に必ずしも答えなかったことは、記憶に新しい。細胞を使った実験や動物を使った実験では、IL-5 が好酸球の増殖分化に多大な関与をしていること、また好酸球がアレルギー性炎症に一義的な影響をもつという知見の蓄積と、組み換え DNA 技術と免疫グロブリンの特異性という近年の生物学の最良なるものを取り入れたプロジェクトであった。抗 IgE 抗体にて、肥満細胞の IgE レセプターの架橋をブロックする試みや DNA ワクチンを使った減感作療法も試みられている。

このセッションでは、あえて大きなフレームワークを拵えて、医療における比較文化論を紹介する。欧米で試みられてきたアレルギー制御を横目に、衣食住という人間の生きられる身近な空間から、アレルギー予防と制御について日本ではどのような制御が工夫されていたのかを概括し、現在、我々のささやかなプロジェクトにて進行中である日本茶によるアレルギー制御の試みを紹介する。